

プロジェクト報告書

【締切:プロジェクト終了後1か月以内。もしくは 2009年4月30日】

団体名 どぜうの会

▼報告書の扱い、および記入にあたっての注意点

この報告書(精算報告書以外)は、ホームページなどで公開する予定ですので、広く読まれることを想定してご記入ください。また、編集段階で、表記・表現等を事務局で編集する場合がありますので、あらかじめご了承ください。語尾の表現は「です・ます」調をお願いします。報告書に掲載するための活動の内容がよくわかる写真(2枚程度。写真の肖像権問題がないものの提出をお願い致します)を添付して下さい。

1. プロジェクト名

ごみと環境—地下水汚染の懸念

2. プロジェクトの目的とその背景 300文字まで

焼却に依存するごみ処理は依然と続けられ、処理困難物のプラスチックにいたっては、エスカレートさえしています。焼却灰に含まれるダイオキシン類や重金属による環境汚染は未だ改善されておらず、処分場周辺の井戸の持ち主のほとんどが、汚染の不安から井戸水は飲料として使っていません。一方自然災害との関連で地下水への関心が高まっており飲み水としての安全性の確保は必至と考えています。

3. プロジェクトの内容 300文字まで

環境シンポジウムの実施

- 1 メンバーによる井戸水の水質調査結果と考察。
- 2 専門的立場からの各パネラー発言および提言
梶山正三氏(弁護士・理学博士)
広瀬立成氏(物理学者・早稲田大学理工学術院総合研究所教授)
瀬戸昌之氏(東京農工大名誉教授)
坂巻幸雄氏(地質学者)
鈴木和夫氏(町田市環境資源部長)
- 3 地域住民の代表による意見や要望。
それぞれの立場からの報告やディスカッション。聴衆を交えての意見交換など。

4. プロジェクト実施にあたっての工夫点とその効果 300文字まで

環境行政を担う担当者を含めたパネラーの工夫したことで、多くの市民に身近な「ごみと環境」について考えて頂く機会を提供でき、ごみを減らすことや、地下水や環境を守って行く為の地域や社会作りのための一助になったと考えています。又、当日、環境保全活動団体の遠方からの参加もあり、今後の交流や協力の可能性も生まれました。

5. 全体的所感、終了しての感想など 300文字まで

日本全国には一般廃棄物の処分場が2000余りありますが、その多くが行政と近隣住民との確執問題をかかえています。そうした中、市民団体と専門家、行政がパネラーとなって地下水についてのシンポジウムを開催する意義は大きく、行政と協働で環境自治を目指している例は貴重と思われます。当日の参加者数は決して多くなかったものの、地下水の持つ根源的な意味合いやその重要性について、共感をもって再確認することができたと感じました。

6. 参考資料

後日、報告書を送付いたします。